

研究主題に基づく実践発表

『学ぶ意味を子供が実感する国語科の授業づくりの実現
～言語生活から学びが始まり、言語生活に学びが還る単元化～』

○ 質疑応答

Q：「問い」を作るときに課題だと感じることは？

また妥当でない「問い」が出てきた時の声掛けや手立ては？

A：子供の問題解決の状況を探り、それぞれに合った支援を行うことが大切。

時には妥当な「問い」をもつためには、たくさん失敗を積むことが大切だと考える。

例えば「今からの3時間は自由に解決していいよ。」という時間を設定する。そうすれば、友達同士で話し合う子もいれば、一人で縦割り活動等での経験を想起し、自分に合った方法で解決して。的外れな「問い」を作る子は周りを見て気付くこともある。子供が自由に考え、問題解決する時間の確保をすること、個々の問題解決の状況を把握し、それぞれに合った支援を行って行く。また、単元構成の仕方を工夫することなども大事だと考える。

Q：「見方・考え方」を生かす授業を積み重ねる上で、具体例を詳しく教えてほしい。

A：見方・考え方を「世の中を見る眼鏡」と捉えている。どんなことをどのように見るか（思考力）、一つの言葉の大事さを味わってほしい。

常に「比べる・変える・つなぐ」をキーワードとする。

「かえる」の提案例：物語「世界でいちばんやかましい音」

最後の部分に「平和になった」という言葉があるが、その部分をなくしてみる、もしくは最後の段落を変えてみると、どの言葉がどういいのかが見えてくると思う。

Q：「問い」作りは課題が多い。個人で課題を進めていくことはしやすいが、全体の「問い」をみんなで作って、解決することが難しい。全体の「問い」の作り方を教えてほしい。

A：単元の問いはクラス共通にするが子供の生活に繋げていくことが大切。子供の学びたい、学ばなければいけないこと、また学ばせたいこと・切実感から作っていかなければいけないと思う。低学年は「おもしろそう」から生活におろして問いを作る。

高学年は自由に物語を読む中でも、その子なりに解き明かしたい問いがあるときに、自由な時間を作って、問いを作らせてみる。